神戸史談 288号(平成10年7月)

銅鐸について

―陰陽道から考える―

―三月例会より（大意）―

東アジアの古代文化を考える会　碓井　洸

一、銅鐸埋納地標高と陰陽道

昨年十月に「邪馬台国は大和である」の題で発表の機会をいただいた際に、出雲荒神谷、加茂岩倉と神戸桜ヶ丘で出土した青銅器の埋納数（表1の左）について、二十八宿、陰陽道と関連があるのではないかとの考えを述べました。

その後、出土地標高（表1の右）、即ち、埋納した土地の高さが陰陽道と関係があったのではないかと考えました。

出土地の標高は、桜ヶ丘が二百四十メートル。荒神谷二十二メートルと加茂岩倉百三十八メートルの合計は百六十メートルです。当時メートル法はありませんが、比率は二百四十対百六十を最大公約数の八十で割ると三対二となります。

陰陽道では、三は奇数で陽を、二は偶数で陰を意味し、出雲と神戸の関係が高さの点でも成り立っている事が考えられます。

また、出雲と神戸の山の標高について考えますと、山陰の大黒山と仏経山ですが、大黒山は大国主命の伝承のある山で、片や仏経山は出雲の四つある神奈備山の一つです。

その二つの山と六甲山の標高とに陰陽道と関係があるのではないかと考えました。

六甲山は九百三十一メートル。出雲二山の合計は六百八十一メートル（表2）で、九百三十一メートルの九と三と一を加えると一三、六と八と一を加えると一五となり、さらに一と三を加えると四、一と五を加えると六となります。即ち六甲山は四で、陰陽道の九星でいうと四緑木星となり方位は巽（東南）をあらわします。同様に、出雲二山は六で、六白金星となり方位は乾（西北）をあらわします。

以上の事から、埋納地の標高、埋納した山の標高まで計算したうえの祭祀であったと考えられます。

(出土地)	(遺跡名)	(青銅器別出土数)					(陰陽別合計)	(出土地標高)m
		銅鐸	銅剣	銅矛	銅戈	計		
出雲(山陰)	荒神谷	6	344(×印) 14	2(中細) 14(中広)				
	計	6	358	16		380		22
	加茂岩倉	14(×印) 25						
	計	39				39	419	138
神戸(山陽)	桜ヶ丘	14			7	21	21	240
合計		59	358	16	7	440	440	400

表1　出雲荒神谷・加茂岩倉と神戸桜ヶ丘の青銅器出土数と出土地標高

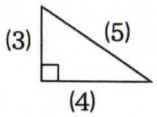
	山名	標高(m)	合計(m)	加算値	基数	九星	方位
山　陰	大黒山	315	681	15	6	六白金星	乾(西北)
	仏経山	366					
山　陽	六甲山	931	931	13	4	四緑木星	巽(東西)
合　計		1612	1612	28	1		

表2　出雲二山と六甲山の標高の陰陽関係

二、π（円周率）・魔方陣・ピタゴラスの定理

つぎにπ（円周率）と魔方陣の関係です。πの九桁の数字を小さい順に、3方陣（図1）の小さい数字の順にあてはめると、図のようなπ九桁魔方陣（図2）ができます。このπ九桁魔方陣の右上から左下へかけての対角線上に三・四・五の数字が並んでいます。これはピタゴラスの定理の最初の数字にあたります。（図3上）

また、左上隅の三つの数字一・九・五の合計が十五、右下隅の合計が九、右上から左下



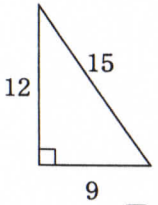


図3

3方陣

2	9	4	15
7	5	3	15
6	1	8	15
15	15	15	45

図1

π9桁

1	9	3	13
5	4	2	11
5	1	6	12
11	14	11	36

図2

への対角線の合計が十二、これらの数字九・十二・十五も、（図3下）のとおりピタゴラスの定理にあてはまることが分かります。

円周率は、数字がランダムに並ぶだけの一次元の世界とするなら、魔方陣のほうは、規則正しく並ぶ数字を、縦と横に並べる二次元の世界とも云えます。その数字の並び方から見ると、円周率は不規則、無秩序、そして無限であるのに対して、魔方陣は規則的、秩序性、そして、一つの方陣でもって示されることから有限といえます。

円周率は一次元ということで陽、魔方陣は二次元ということで陰を現したものとも考えられます。

三、出雲荒神谷遺跡・加茂岩倉遺跡

一九八四年七月、島根県簸川郡斐川町の荒神谷遺跡で三五六本の銅剣。翌年にはそこから七メートル奥に入った所から銅鐸六個と銅矛一六本が一緒に出土して大きな話題を呼びました。それまでの考えでは銅剣・銅矛と銅鐸が一緒に出土するのは極めて希であり、弥生時代の青銅器文化として銅剣・銅矛と銅鐸はそれぞれ別の文化圏を形成していたものとされてきました。その相反する青銅器が一ヶ所から大量に出土したことがまず大きな衝撃を生んだのですが、特に、銅剣がそれまでの全国の出土数の総計を上回る数量であったことが大きな話題となりました。

荒神谷遺跡における銅剣と銅鐸・銅矛の埋納は図4・5に示す通りですが、銅剣の四列の方向と銅矛、銅鐸の並べ方を見ても西北にそろえていることが分かります。

一九九六年十月末に、島根県大原郡加茂町の加茂岩倉遺跡から全国最多の三九個もの銅鐸が出土しました。この銅鐸も図6の通り西北に向けて並べていることがわかります。

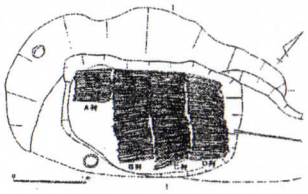


図4　荒神谷（1984）

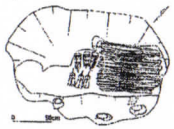


図5　荒神谷（1985）

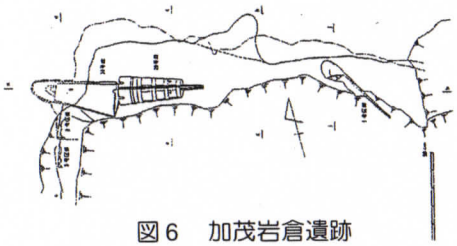


図6　加茂岩倉遺跡

四、神戸桜ヶ丘遺跡

三六年前に神戸市灘区の神岡（カムカ）（桜ヶ丘）で一四個の銅鐸が出土しました。その周辺の状況がどうであったかを改めてみてみますと、その方向が西北に伸びていることがわかりました。実は、この時点では銅鐸は魚崎小学校の校庭に運ばれていて、現場には残っていなかったわけですけれども、図7の長方形の点線で囲んだ枠のとおり、西北の方向に並んでいたことが確認できます。

出雲と神戸はいずれも西北の方向に向いていたことがお分かりかと思います。

そういうわけで、当時二百キロメートル程も離れているところで同じことが行なわれていたと考えられます。

六甲山南麓一帯から西摂平野にかけて、数多くの銅鐸が出土しています。その中でも桜ヶ丘遺跡が最も有名ですが、東へ向って一直線に並んでいるのがお分かりかと思います。桜ヶ丘遺跡のすぐ東は渦が森、保久良神社、生駒、芦屋堂の上と並んで、これらの出土した銅鐸を合計しますと十九個になります。武庫川から東側で九個の銅鐸が出ています。これらの銅鐸の合計が二十八個になり、二十八宿信仰と関係があるのではないかと考えています。

図8　西摂平野の銅鐸出土地

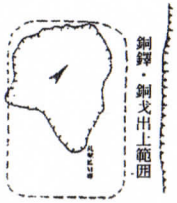


図7　桜ヶ丘遺跡

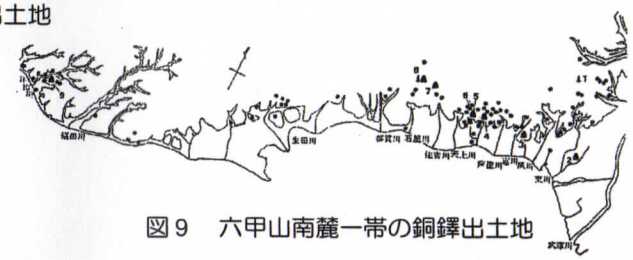


図9　六甲山南麓一帯の銅鐸出土地

五、近江大岩山遺跡

滋賀県の大岩山遺跡（図10）は、加茂岩倉で三十九個の銅鐸が出るまでは全国一でした。

近江大岩山遺跡では、明治十四年に十四個の銅鐸が、さらに、昭和三十七年に十個の銅鐸が出土しました。

図10の大岩山の左上に服部の地名があり銅鐸のマークがありますが、それが桜ヶ丘一号鐸の兄弟銅鐸で、新庄銅鐸と呼ばれ四個出土しています。これらを全て合計しますと二十八個になるところから、二十八宿と関係があるのではないかと考えます。

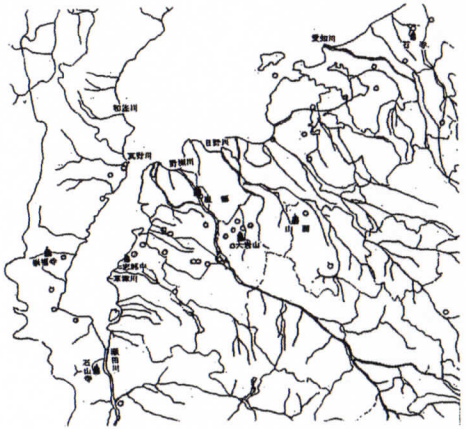


図10　近江大岩山遺跡出土図

六、銅鐸絵画の解釈

銅鐸にはその身の部分や鈕（吊り手）などに人物や動物などの絵画を有するものが四十個ばかり、全体の一割ほど発見されています。

銅鐸絵画の中で特に有名なのが、神戸市桜ヶ丘の四号鐸、五号鐸、それに伝香川鐸（図11）といわれるものです。

これらの銅鐸は、描かれている動物の種類、絵のテーマが農耕や狩猟など共通していることから、同一の技術者が桜ヶ丘五号鐸、四号鐸、そして伝香川鐸の順に連続して作ったものといわれています。

表3を見ると明らかなように、人物では、三鐸とも、男の数が、また、動物の数でも陽の数が多いのが分かります。

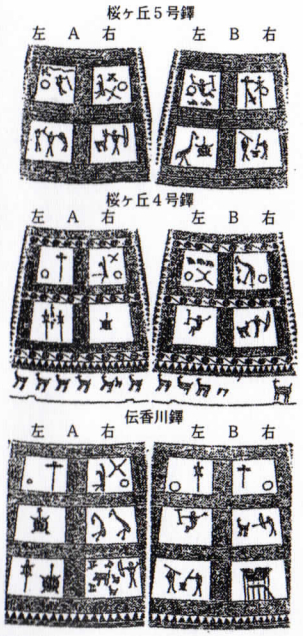
人物画は、三鐸あわせて二十八枚の中の十一を数えますが、女性は、その中の三面に四人描かれているのに対して、男性は、人物が十一面の全てに一人描かれているのが分かります。一という数が奇数で陽を示しながら、男女の合計では陽の優位であるのがわかります。

動物画は、三鐸合わせて十六面に、十二種類の動物四十九体が描かれているのが分かります。まず、陽に分類した動物では鹿、トンボ、トカゲ、サギ、スッポンの六種類の

動物は、描き方は異なっても三鐸全てにあるが、伝香川鐸では、猪が一頭加えられています。

一方、陰の動物では、カマキリ、クモが三鐸全てにあり、桜ヶ丘五号鐸では、ヘビとカエルが、また、伝香川鐸では、犬五頭が新たに加えられているのが分かります。

陰陽別にわけた動物の数（表3）には九星五行、つまり陰陽道と関係あるのが分かります。また、動物の種類別数を三鐸で見てみると、陽で延べ一九種類、陰で延べ九種類となり、あわせると二十八種類となりますが、二十八宿と関係があると考えられます。



春成秀爾「弥生時代の鈴と鹿」
鈴鹿市考古博物館開館記念講演レジュメ、1998より

図11　銅鐸絵画の拓本

銅鐸名	桜ヶ丘５号		桜ヶ丘４号		伝　香　川		合　　計		総計
人物	男	女	男	女	男	女	男	女	計
計	5	3	2	0	4	1	11	4	15
動物	陽	陰	陽	陰	陽	陰	陽	陰	計
動物名	鹿 魚　(3) トンボ(2) トカゲ サギ スッポン	ヘビ カエル(2) カマキリ クモ	トンボ トカゲ(2) スッポン サギ 魚　(3) 鹿　(3) 鹿子　(3)	カマキリ クモ　(2)	トンボ(2) スッポン(2) 魚　(3) サギ　(2) トカゲ(2) 猪 鹿	カマキリ クモ 犬　(5)	猪　1 サギ　4 スッポン4 トカゲ5 トンボ5 鹿　6 魚　9	ヘビ　1 カエル2 カマキリ3 クモ　4 犬　5	49
(種類数)	(6)	(4)	(6)	(2)	(7)	(3)	(19)	(9)	(28)
計	9	5	12	3	13	7	34	15	49
合計	14	8	14	3	17	8	45	19	64

表３　銅鐸絵画の陰陽数

七、青銅器祭祀とフラクタル

近江大岩山遺跡の昭和三十七年発見銅鐸は、大中小、大中小、大中小と数種の異なる三鐸を「入れ子」にして埋めていました。

この銅鐸の「入れ子」の解釈については妊娠した女性、つまり親子の関係、あるいは、合体した男女をあらわしているなど、諸説があります。私は、銅鐸など青銅祭祀器は天文崇拝の陰陽道による祭祀と考えると、この銅鐸の「入れ子」についても天文など別の視点から考えるべきと思います。そこで、この銅鐸の「入れ子」埋納や先に述べた山の標高と円周率の関係について、自然界の相似構造について最新のフラクタル理論から考えてみたいと思います。

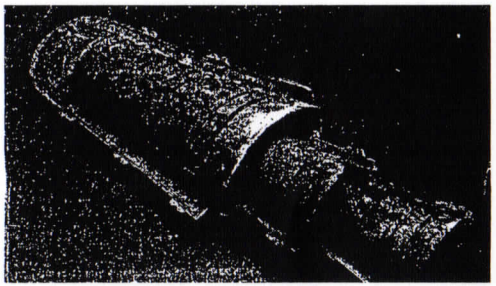


図12　「入れ子」銅鐸

自然界に存在するフラクタルの自己相似図形は、小さいもので言えば、樹木の形、もっと小さいものではＤＮＡの分子構造などにも見られます。逆に大きいものでいえば、大宇宙の構造にも見られるといわれます。つまり、地球を含む太陽系は他の星団とともに銀河系を形成していますが、その銀河がいくつか集まって銀河団を形成し、さらにその銀河団が集まって超銀河団を形成しており、そういう意味では、宇宙の中には、相似な構造が「入れ子」になって組み込まれているといわれています。

それで思い当たることは、銅鐸の「入れ子」埋納はフラクタル、つまり、宇宙の階層を含む万物にみられる自己相似の関係をズバリ形で表したものと考えられることです。つまり、銅鐸の中空の形は、宇宙の階層を含む自然界のフラクタル構造を示すために「入れ子」が可能な立体構造であったわけです。だから時代が新しくなるにつれて、形の大きい銅鐸をつくり、滋賀県大岩山遺跡では三個の「入れ子」三組を同時に埋納するなどの祭祀を行ったのです。弥生人が陰陽道による天文祭祀を行うに当って、中空の三次元の立体造形物である銅鐸の形にあれほどこだわったのは、一つには「入れ子」への強い執着があったからであると考えられます。

（講演・著書から抜粋　　文責　松本丞治）